

Title	<新刊紹介>「オペロン」新刊に寄せて
Author(s)	
Citation	英文学評論 (1954), 1: 195-197
Issue Date	1954-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_1_195
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

るとのべている。イメージとその背後にある思想の関聯性を強調する著者は最後の章においてその問題を更に深く、精神分析にその説明の根拠を求め、ユングの *primordial image* の説を借りている。

以上、章を追って簡単に気づいた点を紹介してきたが、実際は色々の作家よりの豊富な引用があり、それらに基いて具体的に論旨を進め、しかもイメージの問題を中心に全篇が書かれているために極めて充実したものとなっている。また著者自ら詩人であるために、その鑑賞と批評には傾聴すべきもの多く、このような書物はその一々の引用文について熟読玩味されるべきものと思う。

——大浦幸男

「オベロン」新刊に寄せて

「英文学とは葉巻をくゆらしながら紳士道を論じ、或は英語を英語で教える術を研究することであると未だに思っている人がありとすれば……」というのは、昭和十四年に出た「現代英文学の課題」の著者の柔かな諷言であつた。かつて日本の英文学界はお上品に取りすまし、生垣をめぐらした緑の園で内わ同志が知識をひけらかしているようなところがあり、ぼくのような生れ賤しく才拙き者はどうも間違つてまぎれこんできたという感じを免れなかつた。もちろん

ん、ぼくが学校を出た昭和八年にはすでに全国の英文学研究者を打つて一丸とした日本英文学会が生れており、その点ではドイツ文学、フランス文学、いな人文科学の大多數の部門よりはるかに進歩的でありリベラルであつた。だが、その頃の英文学雑誌は、「英文学研究」にしても、「英語青年」にしても、相当英文をたつぷりませた横書の日本語で、たとい内容の立派なものでも読むときに何かしら余分の抵抗を感じた。まして形がいかにめしくて中味のはつきりしないものは一篇を読み終えることが忍耐力の修練になつた。だが気の弱いぼくは、日本人が英文学の論文を書く以上この形式は必然的であるとの不文律に従い若氣のあつかましきで、もし読んで頂いていたら随分御迷惑をかけたようなものを幾つか書きもした。ところがその頃異彩を放つていたのが、当時東大英文科の新進運が出しておられた「オベロン」である。日本語は縦書の方がずつと読み易いことを、同誌によつて改めて悟つた。中には原文の引用が多くて、たびたび雑誌を九十度回転させねばならぬ場合もあつたが、とにかくどれもびのびした氣持で書かれ、なるべく多くの人に読めるようにという極く当りまえの——だが案外当りまえでもなかつた——心構えがうかがわれた。

今度の「オベロン」は決して復刊じやないとあとがきに断つてある。だが、旧臘この雑誌を受取つて封を切つたとき、久々に旧知に

めぐり会つたような気がした。長い戦争と戦後の混乱の後で、昔の友人知人に十数年ぶりまでひよいと出会うことが、ここ一、二年しばしばあるように。事実、表紙をめくつて目次を見れば、そこに並んでいる顔ぶれは、かつての「オペロン」でおなじみの人たちが揃っている。ぼくは別段順序に捉われず、あれこれの論文やエッセイを次々に読んで、結局楽しく全部読んでしまった。京都より東に一度も住んだことがなくて、執筆者中二、三の方とほんの一、二度お会いしたくらいのはくが言うのは失礼かもしれないが、ほぼ同じ世代に属しているという事実が、ここに書かれていることへの説明し難い親近感を抱かせるのであろう。

あとがき「発刊まで」(T・V氏)にもあるように、「オペロン」に対して、アカデミックだ、ジャーナリストイックだとレッテルを貼る必要はないであろう。少くともここに載っている七つの論文は、引用文を原文のままにして横書すれば、英文学関係の学術雑誌にそのまま載りうるだろうし、反対にこの形のまま一般の総合雑誌、文芸雑誌に出ても目障りにもなるまい。一つの書きものが学問への強烈な愛情によつて貫かれており——そのことはむしろ術学とは別物だが——、同学の人たちを裨益するところがあれば学術論文と見てよいだろうし、それが同時に専門外の作家なり読者なりに何らかの示唆を与えるところがあれば一般的な読みものとみてよいで

あろう。科学——英語学をも含めて——の場合と違つて、文学研究の領域では、学界と文壇との間にあまり截然たる境界線を引いて、甲にあらざれば乙、乙にあらざれば甲と、どちらか一方的に登録してしまうのは考えものだ。もちろん両者はそれぞれ独立の存在権を持ち別箇の社会を形成しているが、同時に相互に友好関係を保ち精神的な交易を盛にすべきであり、両者交歓の場としてポーター・ランドがなければならぬ。「オペロン」同人の人たちは優秀な英文学者であり、平素の研究を公にする一つの機関誌としてこの雑誌を持たれたのであつて、右にぼくの言つたような橋渡しを目標にされているわけでは決してないが、その意図の中にはなくともおのずからそうした役目をすれば、この雑誌の意義もますます高められこそすれ、傷つけられることはあるまい。

今一いちの論文について批評する余裕はないが、七篇のうちエリザベス朝劇文学に関するものが、北川悌二氏のジョン・ウェブスタ―と、八木毅氏の「フォールスタフと散文精神(上)」の二つ、十九世紀小説家に関するものが、海老地俊治氏の「虚栄の市」と、辻茂雄氏の「トロロブ雑感」の二つ、他の三篇はいずれも現代文学を取上げ、加納秀夫氏が「不安の文学について」、松村達雄氏が「エリザベス・ボウエン」、それに尾上政次氏が、アメリカ文学を代表して『「アブサロム・アブサロム」の構成』を論じている。巻頭を飾る

「不安の文学について」は、サンソムの「あどけない顔」を中心に、「嘘」とは違つた方向で「真実」と対立する「非真実」に支配された現代の不安を追求したもので、さすが最も読みごたえがある。くつろいだ文体、氣の利いた表現のうち筆者が文学と必死に取りくんでいる熱意がうかがわれる。「フォールスタッフと散文精神」は、未完であるが、近代散文文学の確立に至る礎石の一つとして、あの奇妙奇てれつにして愛すべき男の果した役割が、シェイクスピアのみならずひろくエリザベス朝演劇についての筆者の知識を背景に面白く説かれている。「虚栄の市」論は、一つの分析の試みで、二人の主要人物アミーリヤ、ベッキーの描く線、それぞれに附随する副人物の描く線を取上げてこの小説の特性を解明せんとしたもので、英国小説に精通した筆者が原作を十分咀嚼しやくした上での力作だが、力点がやや拡散しているように感じた。

本号にはなお「海外真聴」(H・K氏)と、小川和夫、中橋一夫両氏のエッセイが出ている。講演旅行に出たこともなく酒も飲めないほくには、小川氏の心境はただ「さもあらん」と想像的に共感する外ないが、中橋氏の説を読んで、まるきり評論家の能力も経験もないほくではあるが、大いに意を強くした。但し、四十を大分過ぎてまだ惑っているほくの懷疑が、怠惰からくる不健康な懷疑精神なら、もう英文学などあつさりあきらめて晩まきながら「英語を英語で教

える術」でも研究した方がよいかもしれぬ。

とにかく東京の中堅級の人たちがこうした研究発表の場を持たれたことは同慶にたえない。もちろん英米文学そのものの本質的性格からいって、英米文学が日本で「流行する」ような日は来ないだろうし、英米文学雑誌がせめて「そろばんに合う」ところまでゆくのもすぐには望めまいから、編集以外に今後色々な困難はあるだろうが、それに屈せず本誌が健全に号を重ねてゆくことを心から祈らずにはいられない。そして序でながら、京都では地方という大きなハندیキャップ——今までの日本の文化政策では東京以外はどうしても地方たらざるを考えない——を排除しつつ、昭和十三、四年出の人たちが張りきつてやつている「海潮音」にも批判の声を聞かせてほしいし、何かの機会に相会して遠慮のない話合いもできれば、英文学大会とはまた別に、明日の日本英文学界をより発らつたらしめるよすがともなりはせぬかとひそかに感ずるのである。

(一九五四・一・S・M)